

研究ノート

## 「移動する子ども」たちのサマーキャンプ

ことばの実践の機会としての一時帰国

東 雅江\*

### ■要旨

「移動する子ども」とその親にとって、日本に短期間滞在する一時帰国での体験はどのような意義があるのか、ことばの実践の機会という面から論考する。海外に居住する家族にとって、一時帰国は子どもに日本語や日本文化に触れさせる機会でもあり、教育戦略の一つとして、日本の小学校に体験入学をさせる親もいる。本稿では、従来からある体験入学などとは違う形の体験の例として、あるサマーキャンプの実践に焦点を当てる。サマーキャンプでの体験は子どもにどのような意味があったのか、親はその子どもの体験をどう捉えたのか詳述する。一時帰国は、子どもにとっては、「移動」を繰り返す人生の中での「移動」体験の一つである。その体験は、多様な背景をもつ「移動する子ども」にとって、ことばの力を育む貴重な実践の機会であると言える。

### ■キーワード

一時帰国  
サマーキャンプ  
体験入学  
「移動する子ども」  
ことばの実践

© 2019. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

### 1. はじめに

本稿では、海外で生活する日本につながりのある子どもの一時帰国の際の体験として、あるサマーキャンプの実践を取り上げ、その意義を論ずる。

\* 上智大学言語教育研究センター非常勤講師 (Eメール: m.higashi@aoni.waseda.jp)

## 1. 1. 年少者日本語教育における「一時帰国」の位置付け

年少者に対することばの教育に関して、家庭の役割については繰り返しその重要性が語られてきた。たとえば、西原（2007）は「子どもの言語選択に関しては親の役割意識と意思決定が第一に重要なポイントとなっている。」（p.59）と親の意識の重要性に言及している。親の意識や行動に焦点を当てた研究は他にもある。たとえば、村中（2010）は、フランスで子育てをしている「日本人母親は、日本語継承をどのように意味づけているか」（p.64）を研究した。

このように、海外で生活する日本につながりのある子どものことばの教育に関して、家庭の役割、親の意識や行動について論じた研究はあるが、一時帰国に焦点を当てた研究はどうか。

村中（2010）には、日本語の「意識的継承の実践の一つ」として「日本への定期的一時帰国」が挙げられているが、母親にとって一時帰国は、自分の子どもを「日本人や日本語に触れさせることも目的のひとつとなっている。」（p.71）と述べるにとどまり、一時帰国での体験の内容などについては詳しくは論じられていない。

他にも、子どもの一時帰国について論じた研究はいくつかあるが、それらの研究は主に子どもの「日本語能力」の変化に注目したものである。

たとえば、ダグラス小川（2005）は、「日本滞在」は、「日本語だけの世界で日本語を習得するイマージョン形態での習得であり、子供たちが感じる日本語でコミュニケーションをすることの真の必要性と動機、日本語との接触量・質・種類、どれをとってもアメリカでの日本語の学習または習得環境では提供できない利点がある」（p.40）とその意義を認めている。その上で、「継承日本語児童2人の日本での夏のイマージョン体験による日本語力の変化を日本出発前、日本から帰国直後、その2ヵ月後の3回にわたって」調査し、「保護者へのインタビュー」と「バイリンガル会話テスト（OBC）」によって測定した。その結果、「日本滞在を機とした言語変化は、児童間で質的、量的に異なり、この結果を一般化することはできない」（p.55）とした。具体的には、一人の児童は3ヵ月と2週間の日本滞在での「言語力の伸びは日本滞在が影響した言語領域とそうではないものがある」とし、また、「帰国後、家庭での日本語使用量が日本滞前に戻り」「日本語力の後退が顕著」（p.54）だったとしている。

また、Sugimori（2006）は、「母語が話される国での体験入学は母語を強めるカンフル剤として注目を集めてきた」とし、米国で育つ日本語と英語のバイリンガルの子どもが、4～6週間の日本語の学校への体験入学前後で日本語能力がどのように変わったか調査している。日本

語能力は会話の中の自然な助詞の使い方と判断し、特に、体験入学前から日本語の力が強かった子どもの日本語習得をさらに促したとしている。

ダグラス小川と Sugimori の研究に共通しているのは、一時帰国前後の子どもの「日本語能力」の変化に注目しているという点である。一時帰国の際の体験の内容や、「日本語能力」以外に、一時帰国が子どもにとってどのような意味をもっているのかという点は研究の範囲には入っていない。

## 1. 2. 問題の所在

海外で生活する子どもにとって、一時帰国でさまざまな体験をさせることに意義があることはこれまでの研究でも指摘されているが、これまで注目されてきたのは「どれだけ日本語がうまくなったか」や、「日本語を勉強する動機につながったか」という点であり、一時帰国の際の体験の内容としても、小学校への体験入学が挙げられる程度であった。これまでの議論に対して筆者が問題だと考えるのは、次の二点である。

一つは、一時帰国の際の子どもの体験として、体験入学や親戚等を訪ねること以外については、これまでほとんど論じられてこなかったという点である。体験入学は一時帰国の子どもが日本の小中学校に短期間在籍するものであるが、公的な制度としては成立していない。各地方自治体によって受け入れ態勢は異なる上、海外の滞在国の学校と日本の学校の夏休み期間が重なれば体験入学は難しい。さらに就学前の小さな子どもや高校生は体験入学のような機会はほとんど望めないなど、体験入学は誰もがができる体験ではない。そのため、体験入学以外の、さまざまな体験の機会についても論じる必要があると考える。

もう一つは、年少者日本語教育では、一時帰国について、単に日本語能力の変化や日本語や日本文化の「意識的継承の実践」(村中, 2010) といった文脈でしか語られてこなかったという点である。筆者は、一時帰国にはもっと他の意義もあるのではないかと考える。たとえば、川上 (2011) は、「『実践』をめぐる日本語教育学的語り」について論じる中で、「言語能力と主体性、アイデンティティを同時に形成していく実践が、これからの時代にはますます必要となってくるだろうし、そのような実践の場所、実践コミュニティの形成が課題となろう。」(p.212) と述べている。この考えを援用すれば、一時帰国の際の体験は、単に言語能力の獲得だけではない「実践」の機会として捉えることができるのではないだろうか。

そこで、本稿では、一時帰国の際の体験の一つのケースとして、海外からの一時帰国の子ども

もたちを対象にしたサマーキャンプに焦点を当て、サマーキャンプは子どもにとって、どのような実践の機会となったか考察し、実践の機会としての一時帰国について論じる。

なお、本稿では、親の仕事が理由で海外に暮らす駐在家庭の子ども、海外永住家庭の子ども、国際結婚家庭の子どもなど、さまざまな事情で海外で成長する子どもを川上（2011）の提唱する「移動する子ども」<sup>1</sup>と捉える。また、海外永住家庭の子どもや国際結婚家庭の子どもにとっては、一時帰国というより「短期日本滞在」という表現の方がより実情に合っている場合もあるが、本研究では便宜上、全て「一時帰国」とする。そして、本稿では、これまでの研究で論じられてきた「日本語能力」ではなく、日本語に限らず、子どもがもつ言語を使ってコミュニケーションする力という意味で、「ことばの力」という言葉を使い、その力を形成する実践を「ことばの実践」とする。

## 2. 研究の概要

筆者は、あるサマーキャンプの活動を手伝いながら、キャンプでの親子の活動の様子や、親を対象としたセミナーでのやりとりを観察し、フィールド・ノートに記録した。また、キャンプ終了後に、海外からの参加者である母親に半構造化インタビューを行った。

これらのデータを次の二つの観点で分析する。一つは、子どもにとって、サマーキャンプでの体験はどのようなことばの実践になったのかという観点、そしてもう一つは、親にとってサマーキャンプはどのような意味があったのかという観点である。

これらの観点から分析した結果により、「移動する子ども」とその親にとって、一時帰国はどのようなことばの実践の機会となりうるか、論じる。

## 3. サマーキャンプの概要

本稿で詳述する「Mix Kicks! ダイバーシティ・サマーキャンプ」（以下、サマーキャンプとする。）は、これまでになかったコンセプトによってデザインされ、2015年に初めて開催さ

---

1 「移動する子ども」とは、幼少期より①空間、②言語間、③言語教育カテゴリー間（第二言語教育、外国語教育、継承語教育、母語教育等）を移動しながら成長する子どもをいう。ただし、これは分析概念であり、実態としての子どもではない。

れた。本章ではそのコンセプト、活動概要について述べる。

### 3. 1. サマーキャンプのコンセプト

このサマーキャンプを主催したのは企画会社 T（仮名）である。T は海外で生活する日本人女性のネットワークをもつ。サマーキャンプの企画のきっかけは、ある「移動する子ども」の親の声であった。

親の声 1. 子どもが 4 歳から 6 歳の補習校入学前にあたる時期に、家庭で日本語教育に力を入れたい。

親の声 2. サマーバケーションで日本に一時帰国した際、日本の学校機関は夏休みである<sup>2</sup>。一時帰国の際に、どのように日本語を学習させたり、日本の文化に触れ合う機会を作ったりすればよいのか知りたい。

親の声 3. 在住する国の文化と日本の文化の間で、揺れるアイデンティティの問題をどう考えればよいのかアドバイスが欲しい。

(2015年3月、企画会社 T「海外在住者が抱える『ことば』の問題」<sup>3</sup>より筆者要約)

この声を出発点に、サマーキャンプのコンセプトが練られていった。そのコンセプトは以下の三点に特徴がある。

一つ目は、小学校就学前から小学校低学年の年齢の低い子どもも参加できるキャンプにするという点である。その背景には、小学校就学前の年齢の低い子どもを受け入れる日本の機関や企画は、これまで、あまりなかったという現状がある。小学校就学前であったり、夏休みの期間が日本と重なる地域に住んでいたたりする子どもは体験入学ができない。そのような子どもを持つ親は、「親の声2」のように、他にできる活動の情報を求めている。一時帰国の子どもたちを対象にしたサマーキャンプはすでに国内にいくつかある<sup>4</sup>。しかし、その多くは小学校高学年

---

2 この家族は、イギリスに住んでいる。イギリスの小学校の夏休みは7月18日から8月31日までで、日本の小学校の夏休みの時期とほぼ重なる。

3 2015年3月、企画会社 T 作成の打ち合わせ資料

4 たとえば、「長野なみあい国際キャンプ」がある。「国内外の多言語多文化環境で生活する子どもたち（3年生～9年生）を対象に、日本の暮らしと、地域の小中学生や人々とのつながりを通して、日本語力を高め、日本文化を体験学習するサマーキャンプ」(<http://www.campnamiai.com>)である。期間は4週間である。2019年で15年目を迎える。

から中学生を対象にしたものであったり、期間が1か月近くに及ぶものであったりする。そのため、小学校就学前から小学校低学年の年齢の低い子どもを念頭に置いた受け皿づくりが必要なのである。

二つ目はアイデンティティの問題についても考える機会を提供するという点である。「親の声3」に出てくるアイデンティティの問題とは、子どものアイデンティティをどう考えるかという親自身のアイデンティティの問題でもある。すなわち、子どもがアイデンティティの問題に直面した時、親はサポートしたいと考えているが、サポートする親自身が、自分の子どもは居住国と日本のどちらの文化やことばを軸にするべきなのかと揺らいでいるのである。そのような親同士が語り合える場を作ろうとしたのだ。

三つ目は「トランスランゲージング (translanguaging)」という概念である。トランスランゲージングとは、Garcia & Li Wei (2014) によって提唱された概念である。多様な背景をもつ人が多様な言語でコミュニケーションをとること、それぞれの言語が独立しているわけではなく、多様な言語を一つの言語レパートリーとして柔軟に使い分けながら行う言語活動を意味する。これまで日本で行われていた、一時帰国の子ども向けのサマーキャンプは日本語を使うことを前面に押し出しているものが多く<sup>5</sup>、トランスランゲージングの概念を取り入れたサマーキャンプはこれまでにはない。企画者側はこの概念に注目し、サマーキャンプのコンセプトとして、「親の声1」に見られるような「日本語学習」ではなく、「日本語の使用だけに拘らず、多様な言語背景をもつ子どもたちが、自分のもつ言語すべてを使ってコミュニケーションする活動」を目指すことにしたのである。サマーキャンプの正式名称も「多様」という考え方を表現するため、「Mix Kicks! キッズ・ダイバーシティー Summer camp in Daigo」となった。

### 3. 2. サマーキャンプの概要

構想期間およそ1年、企画者による親たちへのヒアリングや専門家のレクチャーなどを経てサマーキャンプは実現した。概要は、表1のとおりである。

初めての企画だということもあり、海外からの一時帰国の参加者は、イギリスからの2組の親子のみであった。また、子どもは全員日本語でコミュニケーションができ、活動は基本的に

---

5 前述した「長野なみあい国際キャンプ」では、「日本語を中心とする多言語多文化なキャンプ」だとしながらも、目的としては「読み書きができる日本語力を育てること」、「アイデンティティにつながる日本語や日本文化に自信と誇りをもつこと」を掲げている。

表1 サマーキャンプ概要

|        |  |
|--------|--|
| キャンプ名  | Mix Kicks! キッズ・ダイバーシティー Summer camp in Daigo   |
| 目的     | ①多様な背景をもつ子どもたちのことばの力を、のびのび、すくすくと育てる<br>②子どもたちが本来もつ多様性を引き出す<br>③多文化・多言語の環境にある子どもたちの主体性を育成する<br>④親同士の交流。複言語環境での子育てと、ことばの教育を支援する<br>⑤地域交流や特性を生かした、多様性社会の実現・地域活性を目指す |
| 期間     | 2015年7月31日～8月2日 二泊三日   |
| 場所     | 茨城県大子町。自然豊かな山あいの町で、関東でも有数のオートキャンプ場がある。キャンプ場に近い公共施設を主に利用。   |
| 参加者    | 子ども13名、大人5名<br>参加した子どもの年齢は3歳から10歳まで<br>イギリスからの親子2組（国際結婚家庭）、マレーシアからの帰国後1年以内の親子1組（日本人家庭）、その他に、東京のインターナショナルスクールに通う子ども、キャンプの開催地茨城県からの参加者等                            |
| 主な活動内容 | 言語活動：アートプログラム、お話し会（地元の方による紙芝居等）<br>自然体験：アユのつかみどり、川遊び、野菜の収穫<br>地域交流：バーベキュー、花火大会（夏祭り）<br>参加者の親を対象としたセミナー：「複言語環境での子育てとことばの教育」（講師は川上郁雄・早稲田大学教授）                      |

（キッズ・ダイバーシティー事務局作成の資料をもとに筆者が作成）

日本語で行われることになった。

#### 4. サマーキャンプにおける実践とは

本章では、サマーキャンプの活動実践について、筆者が記録したフィールド・ノートをもとに詳述する。特に子どものことばの力を引き出す活動のプログラムや、日本ならではの体験を通して子どもたちがどのようなことばのやりとりをしたのかに焦点を当てる。

##### 4. 1. ことばの力を引き出す活動実践

本節では、「LEGO タワー」、「お絵かきしりとり」、「ダイバー City の生き物を作ろう」という三つの活動（表1、アートプログラム）を取り上げ、どのように子どものことばの力が引き出されたのか述べる。

###### 4. 1. 1. 競争の興奮がことばを引き出す【LEGO タワー】

大人と子ども25人ほどが一緒に活動する。二つのグループに分かれ、ブロックでタワーを作

り、どちらのグループのタワーが高いか競争をする。

教室に大人と子どもが一緒に座って作った丸い大きな輪が二つできた。それぞれの輪の真ん中にはさまざまな色と大きさのブロックが器から出して広げられている。進行役の「ようい、どん。」の声とともに、皆の手が一斉にブロックに伸びる。大人も子どもも思い思いにブロックを積み上げ、グループの皆で一つのタワーを作っていく。高さにはばかり集中していると、バランスが崩れ、タワーは折れてしまう。慌てて何人かで立て直す。

「時間です」。3分間はあっという間である。進行役が、巻尺で二つのタワーの高さを測る。「Aチームの勝ち」。Aチームがどっと沸く。進行役が話を続ける。「勝負はこれからだよ。チームで3分間、作戦会議をして、もう一度競争します」。

一回目に負けたBチームは、相手チームに作戦を聞かれないよう、顔を寄せ合って小声で話す。「土台を大きく作って、一番上は細くしたら」とグループでも年長の子が切り出す。「一番上の細いところを誰か作って。最後に合体させよう」と大人も真剣に話す。年少の子が「私一番上を作りたい」と主張した。一回目で負けたBチームの作戦は決まった。

第2回戦。Bチームは「始め」の合図とともに一番小さい子どもと大人の一人が細い棒のような、タワーの先端部分を作り始めた。「あと30秒」という進行役の言葉の合図で、Bチームの大人の一人が「じゃあ、合体させよう。気をつけて」とみんなに声を掛ける。「そうっとね」といいながら土台、中心部、先端部を組み合わせる。一回目とは比べものにならないほど高いタワーが完成した。Bチームの逆転は明らかだった。

(2015年7月31日、フィールド・ノートより)

この活動は、「作戦会議」が特に「ことばの力」を引き出す活動として意図されたものである。タワーを作る役割分担を決める際には、小さい子どもも遠慮なく自分の主張をしていた。時間制限もあるため、皆興奮状態で、活発なことばのやりとりが行われていた。

#### 4. 1. 2. ことばへの興味と表現する楽しさを引き出す【お絵かきしりとり】

「LEGOタワー」の活動と同じく、教室内で二つのグループに分かれる。しりとりのことばを、ひとりひとつずつ一畳ほどの大きな紙に絵で描いていき、10分間でどれだけ多く描けるか、二



つのグループで競うというものである。

「だいが」。まず、開催地の町の名前から始める。「ゴマ」。最初の人が、ゴマ粒の点を紙に描くと、「小さくて見えないよ」と笑いがおこる。絵の上手な子どもも、うまく描けない子どもも、短時間に次々に描き、絵で言葉をつなげていく。言葉が思い浮かばない子どもがいると、グループの他のメンバーが助け舟を出す。しばらくしりとりが続いた後、「こたつ」とある大人が言った。「こたつって何？」と、こっそり隣の母親に聞く子どもがいた。

(2015年7月31日、フィールド・ノートより)

絵で表現するので、文字を書けない小さな子どもも問題なく参加できる。たくさん出てきた単語の中には、子どもの知らないものもあったりする。「この言葉、なんだろう」と自然に興味湧いてくる活動である。

筆者はこの日の活動の後、車の中に別の「お絵かきしりとり」の紙を見つけた。活動場所の移動中に車の中で遊んだものらしい。A4サイズほどの紙である。「お絵かきしりとり」ではあるが、その絵には英単語が添えられていた。「お絵かきしりとり」を英単語で行う「英単語しりとり」である。サマーキャンプの活動ではどの子どもも同じように日本語でやりとりをしていた。しかし、その「英単語しりとり」の紙からは、子どもたちの中に、常に複数の言語があり、その複数の言葉で表現することを楽しんでいる様子が垣間見えた。

#### 4. 1. 3. ことばで自分の作品を表現する【ダイバー City の生き物を作ろう】

サマーキャンプ2日目、参加者の親たちがセミナーに参加している時間に、子どもたちは「地域交流アートプログラム」に取り組んでいた。キャンプ参加の子どもだけではなく、地元の子ども16人、高校生のボランティア5人ほどが加わり、子どもだけで30人以上の参加となった。

これは、想像上の生き物を作るというアートプログラムである。紙や布、プレイマイス（水でくっつく粘土のような素材）、そのほかボタンや羽など、さまざまな素材を使い、自分が想像した生き物を作る。自分が作った生き物に名前を付け、住んでいる場所、性格や得意技、弱点、好きな食べ物などを自由に設定し、それを説明書に書き込む。親と一緒にではないので、高校生のボランティアが、小さい子どもの制作を手伝ったり、生き物の得意技や弱点を何にするか話し合ったり決めていたりしていた。

作品は展示されるだけでなく、親などを前にした発表会でも披露された。

司会の男性スタッフが「みんなでダイバー City に住んでいる不思議な生き物を作りました。どんな生き物を作ったか発表したい人は前に出てきてください」と子どもに声をかける。すると、3歳の子どもから小学校高学年の子どもまで、何人も、発表しようと積極的に前に出てきた。会場であるホールに集まった大人たちの前で恥ずかしがる様子は見られなかった。

発表は、司会者の質問に答えるという形で行われた。司会者である男性スタッフと子どもたちは、すっかり信頼関係が出来上がり、やりとりの息がぴったりと合っている。司会者は、ひとりでうまく説明できない子どもには「この生き物はどこに住んでいる?」「好きな食べ物は?」「得意技と弱点は?」などと質問していく。話の流れで、作品を動かして見せたりもする。発表しない子どもたちは観客となり、司会者と発表者のやりとりに笑い声をあげたり、拍手をしたりしていた。

(2015年8月1日、フィールド・ノートより)

発表のやりとりは全員が日本語であった。しかし、発表後に展示された作品の説明書を見ると、絵と一緒に英語や日本語、自分で創造した文字など、さまざまな方法で表現されていることが分かった。たとえば、9歳の女の子は、自分が作った生き物について、弱点を「人がきらい」と漢字交じりで書いた。好きな食べ物については「chocolate and cury<sup>(ママ)</sup>」と英語で、その他の部分はすべて平仮名で書いた。4歳の男の子は、説明書の文は書けなかったが、作品のタイトルとして「UXNW」と書き、ボランティアの高校生に書き加えてもらったのか、「たねのないぶどう」という文字と、本人が描いた、ブドウを表す丸い形があった。作品を作る段階でも、スタッフやボランティアの高校生と子どもたちが多様なことばを使ってやりとりしたことがうかがわせる作品が多かった。

#### 4. 1. 4. 自分のもつ言語全てを使ってコミュニケーションする活動とは

以上述べた「LEGO タワー」「お絵かきしりとり」「ダイバー City の生き物を作ろう」の三つの活動は、どれもことばによるコミュニケーションが必要とされる。しかし、年齢や日本語の力の違いによって子どもが劣等感をもつ場面は全くなく、体を使い、思い切り遊びながら、自然なコミュニケーションを促す活動デザインとなっていた。

多様な言語が飛び交う状況こそなかったが、子どもたちは複数のことばで考えたり、説明したり、表現していた。たとえば、「お絵かきしりとり」は、実際は日本語の単語だけでしりとりが行われていたが、その後自分たちで遊ぶ際には英単語が混ざったしりとりになっていた。地元の高校生と一緒に作品を作る際にも、会話のやりとりで英語が混ざるだけでなく、作品を説明する文字にも日本語や英語や記号のようなものまで混ざっていた。それを注意するものは誰もいない。「自分のことば」を使って自分がやりたい活動ができ、表現したいことが相手に伝わればいいからである。子どもにとって「日本語を使わなければ」というプレッシャーは一切ない。これはまさに Garcia & Li Wei (2014) の言うトランスランゲージングの状態であり、企画者が目指した「自分のもつ言語すべてを使ってコミュニケーションする活動」が行われていたと言える。

#### 4. 2. 多様な子どもとの出会いを通して自分の複言語の力を認識する

サマーキャンプでは、子どもたちが自らのもつ複言語の背景について話す場面もあった。たとえば、移動中の車内での出来事である。筆者とともにキャンプの活動を手伝っていた韓国人の大学院生 Y と子どもたちとの会話である。

子どもたちが Y にどこから来たのか尋ねると、Y は「韓国だよ」と答えた。「日本人だと思った」と驚く子どもたちに、Y は「でもね、日本語だけじゃなくて英語も、中国語も話せるよ」と続けた。それまで話を聞いていた M ちゃんが急に「私ね、中国語知ってる」と言い出した。Y が「すごいね。話せるの」と聞くと、M ちゃんは「もう忘れた」と言ったが、しばらくは車の中で、以前住んでいた国や、さまざまな言語の話題が続いた。

(2015年7月31日、フィールド・ノートより)

6歳の M ちゃんは、日本在住だが、実はその年の春に、父親の仕事のために住んでいたマレーシアから帰国したばかりであった。中国語で生活していたわけではないが、言語の話題で中国語の記憶が蘇ったようである。このサマーキャンプに参加した子どもたちは、日本在住であっても、M ちゃんのように、海外で暮らしたことがある子ども、インターナショナルスクールに通い、学校で日常的に英語を話す子どもなど、さまざまな背景をもっている。

キャンプの最終日に、全員で振り返りを行った時、主催者が「どんなことばを話しましたか」と参加者に問いかける場面があった。その時、子どもたちは、日本語だけでなく、英語、中国語などに手を上げていた。実際にそのような言葉が飛び交っていたわけではないのだが、筆者には、子どもたちが、自分の背景にはそのような言語もあるのだと主張しているように思えた。

サマーキャンプでは、自分と同じように海外で暮らしている子どもや、日本にいながらも海外で暮らす自分と同じように英語で学校生活を送っているインターナショナルスクールの子どもの、日本でしか生活したことのない子どもなど、多様な背景をもつ子どもとの出会いの場である。その中で自分のもつ複言語の力を肯定的に認識することは、貴重な実践の機会であると言える。

#### 4. 3. 日本ならではの体験を通してのことばのやりとり

もちろん、自然の中での遊びや、普段と違う食べ物、夏祭りなど、日本で行われるサマーキャンプならではの体験を通してのことばのやりとりも子どもにとっては貴重な実践である。たとえば、滝を眺めながらの流しそうめん、鮎のつかみ取り体験、花火大会など、おそらく日本国外は体験できないであろう企画に子どもたちは大はしゃぎであった。

地元のボランティアの方々も、このサマーキャンプでは重要な位置を占めていた。お年寄り手作りのお手玉で遊んだ時には、子どもたちから積極的に「何回続けられる？」などと話しかけていた。また、地元農家の方のビニールハウスで野菜を収穫し、薪を使うピザ窯で、収穫したての野菜をのせたピザを焼いて食べたりした。夜の花火大会とバーベキューも地元の方々の協力で行われた。子どもたちは、「お手玉のおばあちゃん」「ピザ焼き窯のおじいちゃん」「綿菓子を作ってくれたお姉さん」などごく自然にやりとりをしていた。

普段暮らしている国とは違う環境で、普段の生活ではやりとりする機会のない相手との自然なコミュニケーションも、キャンプではことばの実践となるのである。

### 5. 親にとってのサマーキャンプの意義

そもそもこのキャンプは、「移動する子ども」の親の声から生まれたものであった。「日本語を学習させたり、日本の文化に触れ合う機会を作ったり」したいという声（第2章、親の声2）や「揺れるアイデンティティの問題をどう考えればよいのかアドバイスが欲しい」という声

(同, 親の声3) である。

本章では, 子どもと一時帰国し, サマーキャンプに参加した親に焦点を当てる。親はどのような考えでサマーキャンプに参加し, サマーキャンプをどのように評価し, 参加することによって親自身がどのように変わったのか。キャンプ後に, 二人の子どもと一緒にイギリスから参加したSさんにインタビューをお願いした。キャンプのプログラムの一つである親対象のセミナーで, Sさんが海外での子育てや子どものアイデンティティの問題について, 悩みを語っていたのが印象的だったからである。

## 5. 1. Sさんのケース

### 5. 1. 1. 複言語環境での子育ての悩み

Sさんは日本生まれ, 日本育ち。短期大学卒業後日本で就職したが, その後イギリスの大学に入学し, そのままイギリスで仕事を始めた。現在は9歳の娘Aちゃんと5歳の息子K君, イギリス人の夫Iさんと4人暮らしである。(年齢はインタビュー当時。以下同様。)

Sさんは, サマーキャンプ参加のきっかけを次のように話した。

Sさん: 複言語環境にいる子どもたちを相手にしたキャンプだということで, うちには英語と日本語両方使っているのだから, 興味をもって参加しました。

筆者: いいなと思った点は, 複言語?

Sさん: そういう環境にいるお父さんお母さんと色々お話しするきっかけもあるのかなと。みんなどうやって教育してるんだらう, 日々悩むことが多いので。やっぱり二言語やっているのでどっちつかず, どっちかが秀でて話せるというわけでもないんですね。(中略) うん, 本当に手探り。試行錯誤で。(後略)

(2015年8月28日, インタビュー, 以下同様)

Sさんの悩みはことばの教育の問題だけではない。

Sさん: アイデンティティのこと。「私って何者なんだらう」。Aは9歳で, まだ「あなたなに人?」って聞くと, 「私, 英語人と日本語人」って言うんですね。「イギリス人, 日本人」じゃなくて。「英語人と日本語人」。(中略) こんな小さくても「僕はイギリス人

だから」っていう子もいるんですよね。英語人、日本語人って何なんだろう。

Sさんは、子どもにキャンプを体験させるだけではなく、海外で子育てをする中で日頃悩んでいる、子どものことばの教育やアイデンティの問題を語り合える機会としてもこのキャンプに期待していたのである。

#### 5. 1. 2. Sさんが考えるキャンプの意義

サマーキャンプでは、Sさんの娘のAちゃんは、一緒に参加した、いとこのMちゃん（日本在住、10歳）とともに年長であった。キャンプでは弟のK君だけではなく、他の小さい子の世話もよくしていた。Sさんにキャンプでの子どもたちの様子をどう感じたか尋ねた。

Sさん：Kはまだ楽しいだけでそれで十分という感じですけど、Aの言語能力をもっとワンランクアップさせるキャンプを求めてたら、ちょっと物足りないものだったかな、という風に思いました。

キャンプのコンセプトとして、就学前の子どもも参加できることを前提としていたので、Sさんは、もし自分がAちゃんの言語能力の向上だけを求めていた場合は、物足りないものとなっただろうとしながらも、別の点でキャンプを評価していた。たとえば、キャンプでは最後にみんなで振り返りを行った。その中で、このキャンプでどのような言語を話したか子どもに聞いた場面で、「英語を話した人」と言う声にAちゃんは大きく手を上げていた。筆者は移動のバスの中で見つけた「英単語しりとり」を描いたのはAちゃんではないかと思い、Sさんに尋ねたところ、次のような答えが返ってきた。

Sさん：私は全然気付かなかったんですけど、そういうのいいですね。「英語でこう言うんだよ」「日本語でこう言うんだよ」とか。

つまり、Sさんは日本語能力の向上だけに拘らず、さまざまな言語を積極的に使ってコミュニケーションをするサマーキャンプの趣旨を肯定的に捉えたのである。

さらに、Sさんは、自分自身にとってもこのキャンプは意義があったと語った。

Sさん：いろんなご家庭の方針，言語に関する方針とか，いろいろ聞けて私は有意義なキャンプでしたね。(中略)川上先生のお話だったりとか他のお父さん，お母さんのお話を聞いて，あ，皆も同じように迷っているんだな，安心した面もあるし。ま，答えがないですからね。

自分の子どもが「同じ境遇の子どもたちと一緒に遊ぶことができれば楽しいんだろうな」と考えて参加したSさんは，同時に自分自身も，同じ立場の親たちとの交流によってさまざまなことを考え，意義のある時間を過ごせたと言える。

## 5. 2. Nさんのケース ～サマーキャンプへの新たな価値付け

一方，サマーキャンプの体験を経て，実践者として新たな行動を起こした親もいる。第1回では親として参加し，その後スタッフとなったNさんである。Nさんは，第2回キャンプからはスタッフとして運営に参加し，パンフレットに次のようなコメントを載せている。そこには，娘と一緒に第1回キャンプを体験したNさんの，キャンプに対する価値付けが現れている。以下に抜粋する。

### 《海外から参加される皆様へ》

日本への一時帰国は，日本語や日本文化を習得する良いチャンスであり，日本の子どもたちに多文化環境について発信する機会となります。

### 《日本から参加される皆様へ》

普段の生活の中ではなかなか異文化を意識することが難しい日本の子どもたちにとって，語学への興味関心を促すだけでなく，海外で生活する多様な文化背景を持つ子どもたちと共に活動することで，世界には多くの人々が住んでいて，みんなそれぞれ違うことなど多様性の大切さを体感する良い機会となります。

(キッズ・ダイバーシティ事務局作成「2016 Mix Kicks! Summer Camp」パンフレットより抜粋)

このパンフレットによると，「日本への一時帰国は，日本語や日本文化を習得する良いチャンスである」という，従来からある一時帰国に対する考え方に加え，「日本の子どもたちに多文化

環境について発信する機会」であると価値付けされており、この点が、新しい。次に続く文では、日本に住んでいる子ども（とその親）に対して、「多様性の大切さを体感する」良さを強調している。つまり、海外から一時帰国する子ども、日本に住んでいる子どもの双方が参加することにより、初めてこのキャンプは成り立つとしたのである。キャンプでは、海外から一時帰国する子どもと日本に住んでいる子どもの両方が主役なのである。この点は、これまで行われていたサマーキャンプにはなかった発想であり、特筆すべき点である。

## 6. 一時帰国はどのような役割を果し得るのか

ここまで、一時帰国の子どもとその親が参加した、あるサマーキャンプの実践を詳述してきた。本章では、サマーキャンプをことばの実践の機会として捉え、「移動する子ども」とその親にとって、どのような意義があったのかまとめ、ことばの実践の機会として一時帰国にはどのような可能性があるのか、考察する。

### 6. 1. 「実感に支えられた『複言語』使用経験」

一時帰国の際に参加できるサマーキャンプのような活動の意義を論じた先行研究はほとんどないが、成長した子ども自身の語りからことばの学びを論じた研究から、示唆を得ることができる。たとえば、尾関・深澤・牛窪（2011）は、日本国外で成長した若者がどのように日本語使用を経験してきたのかをインタビューし、「実感に支えられた日本語使用経験とそれに伴う人間関係の構築が、彼らの日本語の学びや生き方に影響を及ぼしている」（p.18）とした。尾関ら（2011）が言う「実感に支えられた日本語使用経験」とは、「他者との関係の中で自分が言いたいことや伝えたいこと、また、ありのままの自分を表現し、それが相手に理解されたという実感を伴う日本語使用経験」（pp.18-19）である。

では、サマーキャンプに参加した子どもたちにとっての「実感に支えられた日本語使用経験」とはどのようなものであったか。たとえば、「みんなでつくろう！ダイバー City」では、「想像上の生き物」を制作する過程で、小さい子どもは、ボランティアで参加した地元の高校生に手伝ってもらっていた。子どもは自分のアイデアを高校生に説明し、生き物のキャラクターの設定を相談して決めたり、文字の書けない子どもは、自分が説明したものを説明書に書いてもらったりしていた。また、作品の発表会では、希望者のみであるにもかかわらず、多くの子ども



もたちが積極的に前に出て発表しようとしていた。司会の大人に助けられながら、楽しそうに一生懸命自分の作品の説明をする子どもたちは、その時、一人ひとりが主役になっていた。このようなサマーキャンプの活動は「他者との関係の中で自分が言いたいことや伝えたいこと」を自分なりに表現し、「相手に理解された」という成功体験として子どもたちに記憶されるのではないだろうか。

また、「ありのままの自分を表現し、それが相手に理解され」というのは、たとえば自分のことを「英語人と日本語人」と話す9歳のAちゃんであれば、そのAちゃんが相手から「英語と日本語を話すAちゃん」としてそのまま受け入れてもらえるということである。このサマーキャンプでは、コンセプトとして「日本語の使用だけに拘らず、多様な言語背景をもつ子どもたちが、自分のもつ言語全てを使ってコミュニケーションする活動」を目指した。まさに、「ありのままの自分を表現」することが奨励される活動だったわけである。

尾関ら（2011）の「実感に支えられた日本語使用経験とそれに伴う人間関係の構築が、彼らの日本語の学びや生き方に影響を及ぼしている」という主張を援用すると、サマーキャンプの場合は、「実感に支えられた『複言語』使用経験」が、「彼らのことばの力を育み、ことばの学びや『移動する子ども』としての生き方に影響を及ぼす」と言い換えられるのではないだろうか。

## 6. 2. 「移動」することによって生まれる実践の機会

次に、一時帰国を、「移動」することによって生まれる実践の機会と捉え、考えていく。

筆者は一時帰国を「移動する子ども」にとっての「移動」の経験の一つだと考える。それは、居住国から日本へ空間的に「移動」し、居住国とは違う言語が話される場で生活する、すなわち言語間の「移動」を経験するという意味である。この「移動」によって、子どもたちは居住国とは違う日常生活や言語使用を経験する。サマーキャンプの場合、花火や流しそうめんなど、居住国ではできない夏の生活を体験したり、多くの日本在住の同年代の子どもや年上の高校生や大人とやりとりをしたりした。また、自分と同じように海外で暮らす子どもとも交流できた。つまり、サマーキャンプは、「移動」することによって多様な背景をもつ自分を認識し、同じように多様な背景をもつ他者やそのような背景をもたない他者と出会い、人間関係を構築する機会であったのである。

川上（2011）は、「『移動する子どもたち』に必要なことばの力とは、多様化する社会の中で、

さまざまな異なる文化的背景や考え方を持つ他者とやりとりする力であり、自己を見つめ、自己の考えを語る力である (p.161) と主張する。その視点から考えると、サマーキャンプでの体験は、川上の言う「『移動する子どもたち』に必要なことばの力」を育む機会であったと言える。

また、川上 (2011) は、「『実践』をめぐる日本語教育学的語り」について論じる中で、「言語能力と主体性、アイデンティティを同時に形成していく実践が、これからの時代にはますます必要となってくるだろうし、そのような実践の場所、実践コミュニティの形成が課題となろう。」(p.212) と述べている。サマーキャンプは言語能力を伸ばすだけでなく、活動に積極的に取り組むことによって主体性を育むものであった。また、自分と同じように海外で暮らす子どもや日本国内で成長している子どもなど、さまざまな背景の子どもと触れ合うことによって改めて自分自身の多様な背景、アイデンティティに気づく機会でもあった。サマーキャンプには、まさに川上の言う「実践」があった。

まとめると、「移動する子ども」にとって、サマーキャンプは、「移動」することによって生まれることばの実践の機会であり、「言語能力と主体性、アイデンティティを同時に形成していく実践」の機会であったと言える。そして、サマーキャンプの体験は一例に過ぎず、一時帰国において、同じような「実践の場所、実践コミュニティ」を作ることは可能だと考える。

### 6. 3. ことばの教育の実践者として自らの教育観を更新する機会に

一方、親にとっては、サマーキャンプは自らの教育観を更新する機会になったという点に意義がある。たとえば、サマーキャンプは、「日本語の使用だけに拘らず、多様な言語背景をもつ子どもたちが、自分のもつ言語すべてを使ってコミュニケーションする活動」を目指した。一時帰国の際に「日本語を学習させ」たい (第2章、親の声2) と思うことが、これまでの一般的な親の考え方である。しかし、サマーキャンプの後、Sさんは「『英語でこう言うんだよ』『日本語でこう言うんだよ』と子どもたちが自分の言語について教えあうことを「いいですね」と好意的に捉えた。また、Nさんは、一時帰国は海外に暮らす子どもが「多文化環境について発信する機会」だとパンフレットに書き、一時帰国を単なる日本語学習の機会としてだけではなく、子ども自身が、自分の複言語の力を活かしコミュニケーションする機会だと価値付けた。

このように、サマーキャンプは、参加した親同士が交流し、専門家の話を聞いたりすることによって、それぞれ自分の教育観を更新し、一時帰国に新しく価値付けをするきっかけになっ

たと言えるのである。

## 7. おわりに

一時帰国は、子どもにとっては、「移動」を繰り返す人生の中での貴重な「移動」体験の一つである。その体験は、多様な背景をもつ「移動する子ども」にとって、ことばの力を育む実践の機会である。一方、親にとっては、一時帰国はことばの教育実践の機会であり、実践者として子どもを支えるだけではなく、親自身も自らの教育観を更新する機会ともなりうる。

本稿では、一時帰国の際の体験の例として、あるサマーキャンプでの実践に焦点を当てた。2015年の第1回の開催時は海外からの直接の参加者が2組だけで、居住国にも偏りがあったが、国内の子どもと一時帰国の子どもが共に活動することで、お互いに多様性を感じあえる実践となった。その後、キャンプは毎年開催され、2018年度現在まで4回開催されている<sup>6</sup>。4年連続で参加している親子もあり、そういった親子にとっては里帰りして従兄弟達と過ごす夏休みのように感じられるのではないだろうか。参加する親子の顔ぶれに合わせながら、サマーキャンプの実践は定着しつつある。

本研究でサマーキャンプの実践を取り上げたのは、一時帰国の際の体験として、子どものことばの実践や親の意識の変化が、わかりやすく現れる例であると考えたからである。もちろん、サマーキャンプでなければ、ことばの実践にならないというわけではない。たとえば、多くの一時帰国の親子が親戚を訪ねて交流したり、日本国内を旅行したりしているが、そのような体験の中にも、やはり子どものことばの実践があると考ええる。また、見方を変えれば、日本国内に限らず、国外でも、さまざまな背景をもつ子どもたちの集う活動を行った場合、それは子どもにとってはサマーキャンプと同じようにことばの実践の場となりうると言えるのではないだろうか。

「移動する子ども」のことばの力をどのように解釈し、伸ばしていくのか、それを実践する機会としての一時帰国のあり方は、家族それぞれによって違い、そして、さまざまな可能性を秘めている。これからも「移動する子ども」のことばの実践の機会としての一時帰国について論じていく必要があると考える。

---

6 <https://kidsdiversity.wixsite.com/mixkicks> (2019年3月25日閲覧)

文献

- 尾関史・深澤伸子・牛窪隆太 (2011). 日本国外で成長する子どもたちにとっての日本語使用経験の意味——子どもたちはどのように日本語と向き合ってきたのか『リテラシーズ』9, 11-20. <http://literacies.9640.jp/vol09.html>
- 川上郁雄 (2011). 『「移動する子どもたち」のこぼの教育学』くろしお出版.
- ダグラス小川昌子 (2005). 継承日本語児童の夏休み日本滞在による日本語能力の変化：ケーススタディー. *Journal CAJLE, Vol.7*, 39-58.
- 西原鈴子 (2007). バイカルチュラル家族の子ども——言語獲得と言語運用. 『異文化間教育』26, pp.54-60.
- 村中雅子 (2010). 日本人母親は国際児への日本語継承をどのように意味づけているか——フランス在住の日仏国際家族の場合. 『異文化間教育』31, 61-75.
- Garcia, O. & Li Wei (2014). *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Sugimori, A. N. (2006). Effects of visiting enrollment on Japanese-English bilingual children being raised in the U.S. *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism, 12*(1), 1-25. Retrieved from <http://www.bsig.org/#!2006/c16xa> (2016年3月31日閲覧)